



Symphony Lounge

[シンフォニー・ラウンジ]

# マンフレッド—孤高のヒーロー

中村博文(日本バイロン協会副会長、元千里金蘭大学教員)

Text by Hirofumi Nakamura

ジョージ・ゴードン・第6代男爵バイロンは、ワーズワスと並びイギリス・ロマン派を代表する詩人である。彼は、『チャイルド・ハロルドの巡礼』、『ドン・ジュアン』などの長大な物語詩に加え、『マンフレッド』や『カイン』などの劇作品も書いている。彼は大変行動的で、ヨーロッパ大陸の多くの国々、そして果ては現在のトルコまでをばる旅を行っている。彼は社交界の寵児としても、数々の女性遍歴を繰り返すプレイボーイ的な面は否定できないが、イギリス貴族の血筋を引く自由奔放な生き方は、当時ヨーロッパの文人たちに多大の影響を与えた。

その一人ゲーテはバイロンの並外れた才能を見出し、バイロンへの賛辞として『ファウスト』第2部にオイフォーリオンを登場させた。オイフォーリオンはギリシア神話のイカロスのように高みへと飛翔を続け、「死ぬことこそ自身の掟だ」と語りつつ、空中から身を躍らせ死を遂げるのである。ゲーテは、その独創性、モダンな作風、飽くことを知らない性格などにより、バイロンが卓越した詩人であると評している。霊と肉のディレンマから精神の高みへと上昇を試みるが、肉体の重みに耐えきれなくなり再び地に引き戻されるというパターンを、彼は自身の作品中で繰り返して

## マンフレッド — 孤高のヒーロー

いる。愛と憎しみ、精神と肉体、善と悪といった二律背反の振り子が絶えず往復し続けているようなバイロンも、「ロマン派的苦悩」の申し子だったといえる。

バイロンの作品は、ゲートを通して他の詩人に紹介された。ポーランドで国民詩人として最も名高いアダム・ミツキエヴィッチもその一人である。彼の代表作『コンラート・ヴァレンドット』や『パン・タデウシュ』には、バイロンの影響を見出すことができる。ミツキエヴィッチはショパンとも親交があり、ショパンの4つのバラードは、ミツキエヴィッチの作品からインスピレーションを得て作曲されたといわれている。更にバイロンは、当時オスマン帝国の支配下にあったギリシアの独立運動も積極的に支持し、1823年ギリシア暫定政府代表から要請を受け、翌年ギリシア独立戦争の最中に、ギリシアのミソロンギに上陸するもその地で病死する(同年4月19日)。ポーランドも当時、ロシアからの独立運動が激しく、熱烈な独立支持派のミツキエヴィッチは投獄を繰り返していたが、自由の闘士バイロンがギリシア独立に尽力し、ギリシアにて命を落とした点は、ミツキエヴィッチを大いに鼓舞したであろう。

バイロンの影響は、文芸に造詣が深い作曲家にも及んでいる。ベルリオーズは、『イタリアのハロルド』をはじめとして、先輩の文人たちの作品にちなむ楽曲を少なからず残している。これは、ベルリオーズと親交があったリストにも受け継がれ、彼も

バイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』によるピアノ独奏のための組曲『巡礼の年』などを残しているのは一聴に値する。

ベルリオーズは1867年2度目のロシア訪問の際、彼の作った『イタリアのハロルド』を演奏曲目に入れ、それがロシア人にバイロンの作品を紹介するきっかけとなった。そのような経緯で『マンフレッド』もロシアに紹介されたと思えるが、最初に『マンフレッド』に基づく作品の作曲を依頼されたバラキレフは、あまり関心を示さなかった。やがて彼はチャイコフスキーに作曲を依頼し、作品の具体的な構想を提案している。チャイコフスキーは『マンフレッド』を読むうちに、益々バイロンに魅了されてきたようで、1885年に『マンフレッド交響曲』を完成させた。

ドイツ・ロマン派の代表的作曲家シューマンにも『マンフレッド』にまつわる作品がある。ベルリオーズ同様、シューマンも文学に造詣が深く、文筆評論も積極的に行っていた。当時の音楽界の保守派に対し、彼は「ダヴィッド同盟」なる架空の団体を想定し論陣を張った。シューマン作『マンフレッド』は、オーケストラの演奏に、独唱者や合唱が伴っているがオペラではなく、いわゆる付随音楽の範疇に属している。シューマンもバイロンの作品に精通していたことは疑いなく、例えば、有名なショパン作スケルツォ第2番に関しシューマンは、「優しさと大胆さ、愛と憎しみが満ちていて、バイロンの詩に匹敵するが、それは聴く人に楽しみを与えない」な

どと、バイロンを引き合いに出しつつ些か辛辣に批評している。

バイロンの『マンフレッド』(1817年)はドラマ形式の作品である。一般にロマン派のドラマはクローゼットドラマまたはレーゼドラマと言い、舞台にかけのよりむしろ読んで楽しむものだといわれている。なぜなら、ロマン派の劇にはしばしば異界の霊や妖怪など、いわゆる形而上的な存在が登場するため、舞台演出が困難極まるためかもしれない。上記シューマンの『マンフレッド』が、オペラではなく付随音楽の形式で作られたのも頷ける。

スイス・アルプスの高峰に囲まれた城の城主マンフレッドは、ドラマの冒頭真夜中の城内で独白を行い7人の霊たちを呼び出す。マンフレッドは霊たちに懊悩の忘却を求めるが、それは叶わずマンフレッドの願望はここで頓挫する。作品を読み進むにつれ、主人公はアスタルテという女性の霊を呼び出し赦しを求めようとしていることがわかる。無論、アスタルテは、実際にはバイロンの異母姉オーガスタ・リーであることに読者は気づく。バイロンはオーガスタと近親相姦の関係にあったといわれ、当時それは社会的地位の失墜を意味していた。

主人公は悪魔の王アリマネスの館を訪れ、様々な霊たちが飛び交う中、アリマネスにアスタルテの霊を喚起するように懇願する。ここで主人公は、アリマネスに向かって毅然とした態度を変えることはない。そこに、貴族バイロンのプライドを読



み取ることもできる。最終場面で、臨終の床のマンフレッドに修道院長が訪れ、神との和解を求めるよう諭す。他方霊も彼の魂を奪いに来る。マンフレッドは、いずれをも拒否し、「死ぬことはさほど難しくはない」という言葉を残し息を引き取りドラマは幕を閉じる。あたかもすべてを拒否するかのようなマンフレッドが、「死」を素直に受け入れるのは些か不可解だ。チャイコフスキーの場合、最終楽章の最後にオルガンがグレゴリオ聖歌「怒りの日」の旋律を奏で曲は静かに終わる。(オルガン無しのバージョンもある)果たして、マンフレッドの魂は救済されたのだろうか。

他に、第一幕スイス・アルプス、ユングフラウの断崖上に行むマンフレッドも、孤高のヒーローとしてダイナミックなスケールを醸し出す。そして、遙か谷底から聴こえてくる、素朴だが清らかな生活を営む山の住人が口ずさむ民謡風の歌。素晴らしいコントラストを成す場面だ。これは、チャイコフスキーの場合、第3楽章に現れる。是非、『マンフレッド』のテキストを読み、スイス・アルプスを訪れ、イメージを膨らませてほしい。